連載 ★ 渡航歴 30 回、滞在日数約２年

白根 全のキューバの呪い④

持たざる者こそが崇高な存在と化すのか

フィデルがもう少し演説下手だったら……

毎日必ずスコールに見舞われた。その日も午後早くから雲行きが怪しくなってきていた。独裁と腐敗で名を馳せた元バチスタ大統領官邸、豪奢な白大理石造りの革命博物館を一回りする。革命は博物館内に展示するもの、ということは、まだ現役で活躍している老革命戦士たちは動物園で展示せよ、という話にならないのだろうか。

革命博物館をはじめ、すべての博物館や美術館は入場無料。社会教育の一環ということだろう。チェの髭と髪の毛などというフェティッシュな遺物も並ぶ。旧式の重く無骨なマシンガンや弾痕の残る血染めの軍服よりも、絢爛豪華な建物の内装に視線が奪われる。館内を一回りし、奥に展示された「グランマ号」に足を延ばす。

メキシコのベラクルス近郊の港トゥスパンからフィデル率いる７月 26 日革命運動の闘士 82 人を乗せて、キューバ上陸侵攻を果たしたクルーザーだ。定員 12 名のおばあちゃん号は全長 13 メートル、思ったよりもずっと小さい。バチスタ政府軍の待ち伏せ攻撃をかいくぐって反攻拠点シエラ・マエストラにたどり着いたのも 12 名で、その中にはフィデルはもちろん、弟ラウルやチェ、カミーロ・シエンフエゴス、フアン・アルメイダら革命の立役者が揃っていた。かろうじて二桁のよれよれコマンドを前に、フィデルは「これで勝った！」と大喜びしたという神話が語り継がれてきた。

空調付きの巨大なガラスケースの中に鎮座する革命モニュメント、すなわち聖なるイコン。そういえば、カトリックの伝統がほとんど途絶えたこの国では、フィデルも列聖されたサントか 12 使徒のひとりと同様に、本来であれば大聖堂に鎮座していてもおかしくはない。生きて、動いて、革命を指導する聖人フィデル。これが、熱帯社会主義国キューバに君臨する権力の代理人としての正しい在り様なのだろうか。

やせっぽちのヒトラーは、絵描きになり損ねた陰惨で陰鬱な独裁者だった。彼にもう少し絵心があったならと夢想するのと同じように、髭のフィデルがもう少し演説下手だったら歴史はどのように展開したことか。立ちのぼる色気と品性に裏打ちされた野性味。なんという知的なドラマをキューバは演出したのか、思わずため息が漏れる。

雨が降り出した。大きな雨粒が路面から跳ね上がる。博物館の入り口わきのベンチに座ってスコールが通り過ぎるのを待つ。小学校高学年ぐらいの少年がすっと横に座った。無言でちらちらこちらをうかがっている。間を置いて、恥ずかしそうに話しかけてきた。

スペイン語話しますか？　どこから来たの？　日本って中国のそばですね。　ふーん、遠いんだ。当たり障りない質問を連発したあと、急に覚悟を決めたような厳しい顔つきを浮かべた。

「今日は僕の誕生日なんだ。あのさ、この靴見てよ。両側とも穴があいちゃってさ。もう、サイズも小さいんだけど、新しいの買ってもらえない。もうすぐ配給されるってママは言ってたけど、いつまでたっても靴は来ない。あのさ、その先のドルショップの左奥の棚に、すごくかっこいい靴が並んでるんだ。でも、僕は買えない。ドルなんか持ってないし、サイズはちょうどいいのがあるけど、でも僕は買えない……あのさ、……」

足元を見る。汚れたスニーカーというよりは、日本の小学生が履いている屋内履きのようなコッペパン型のボロ

靴。その先から親指がのぞいている。カリブ海のフランス領マルティニーク島を舞台に、島出身の女性監督ユーザン・パルシーの描いた泣かせる映画「マルティニークの少年」の主人公役の少年にそっくりな面立ち。くりくりした瞳とつやつやの顔。決して不幸そうには見えない。でも、靴の穴。そして誕生日。隣のベンチから大声が響いた。

「恥ずかしいことをするなっ！　お前の誕生日は年に何回あるんだ。この前も同じことを外国人に言っていたのを俺は聞いていたぞ。恥を知れ！」

白い制服の少年は雨の中を全力ダッシュで走り去る。怒鳴り声の主は貧相な初老の男だった。はき捨てるような口調で、少年の後ろ姿に向かって怒鳴る。その声に背中を押しやられるように、ますます速度が上がる。

「恥を知れ、このクソがきがっ！　申し訳ありません。恥ずかしいことです。外国人にたかるなんて、以前は決してなかったことだ。恥ずかしい限りです」

こちらが叱られたような気になっていた。持てる者と持たない者はすなわち正義か悪か。持てる者は神か、あるいは持たざる者こそが崇高な存在と化すのか。いたたまれずに立ち去ろうとする私に、男の謝罪の声がまだ追ってくる。旅が出来る側と出来ない側、という旅先でいつも出くわす命題。答えがキューバにあるのだろうか。いつの間にか雨は上がり、黄金の西日が街路をさっと一筆ずつ塗っていく。

カリブ海取材初日のジャマイカ、リゾートホテルの真っ白なビーチの先は、ゴミの散らかる現地人御用達の海岸だった。豪奢なホテルの外観を引き気味に撮影しようと柵を越え波打ち際を歩いていると、キューバのボロ靴少年と同じくらいの年代のガキどもに囲まれた。しつこくまとわりついて、露骨に金をせびってくる。が、その物言いと眼差しには強固なものがあって、貧困や飢えた胃袋は正義だという確信に満たされている。

持てるものから奪って生き延びる力、すなわち力学の法則。単純な話だ。別のカモを見つけて走り去るガキどもの後ろ姿に、昂ぶった肺腑から意図せぬまま安堵のため息が漏れる。否応なく旅は続いていく。

そうそう、ハバナのカーニバル情報も集めなくては。

（続く）

しらね　ぜん

日本で唯一、世界中でも２人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、６大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。
定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。

11月13日にキューバ友好円卓会議からキューバ大使館あてに送付したメールです。

ベレイラ駐日キューバ大使殿

キューバ友好円卓会議

第64回国連総会で、貴国提案の「米国による対キューバ経済封鎖の解除を求める決議案」が、国連加盟国193国中191カ国の賛成で採択されたことを、心から祝福します。

また、11月8日に発表されたトランプ政権による経済封鎖強化と米国市民に対するキューバへの渡航制限強化に強く反対します。

キューバ音楽の魅力に酔う

９・９キューバ友好フォーラムに50人

高橋研二さんと竹村淳さん

キューバ友好円卓会議は９月９日（土）午後、東京・内幸町の日本プレスセンター内、日本記者クラブ大会議室で、2017キューバ友好フォーラム「魅惑のキューバ音楽を満喫しよう」を開催しました。

キューバ友好円卓会議がキューバの音楽を取り上げたのは、2004年のキューバ友好フォーラム「有機農業・医療・教育で世界のトップを行くカリブの奇跡キューバ」、2013年のキューバ友好フォーラム「いま改めて語ろう、キューバの魅力」以来でした。

フォーラムでは、音楽ジャーナリスト・竹村淳さんとラテン音楽愛好家・高橋研二さんが「キューバ音楽と日本人」と題して講演しました。その中で、両氏は、マンボ、チャチャチャ、ボレロ、ルンバなど、日本人を引きつけて止まないこれらの音楽が、いずれもキューバ音楽であることを明らかにし、これらの音楽がいつごろ日本に入ってきたのか、そして、日本人にどう迎えられ、愛好されてきたかを、さまざまなエピソードを交えて解明しました。

フォーラムの参加者は約50人でしたが、いずれもキューバ音楽の魅力に魅せられたようでした。